

なら

植防ニュース

日本植物防疫協会主催シンポジウム
「最新の水稲における病害虫防除を巡る課題」

9 月 17日に東京都北区の北とぴあ「つつじホール」及びオンラインにて標記シンポジウムが開催された。その一部を紹介する。
「近年の水稲カメムシ被害と防除に対する取り組み」

農研機構植物防疫研究部門 高篠賢二氏

斑点米カメムシ類の発生面積は近年高い傾向が続いている。増加要因は様々あるが、特に影響を受ける可能性がある要因として、気温(高温・温暖化)とイネカメムシの再興が挙げられた。気温(高温・温暖化)では、春～秋の高温は活動・繁殖が活発になり世代数が進み、冬の温暖化は越冬時の生存率が上昇するため、分布域が北上し、拡大につながる。イネカメムシは 1950 年代まで斑点米カメムシ類の主要種であったが、1960 年代以降激減した。しかし、2010 年以降各地で発生・被害が増えている。本虫は、他の斑点米カメムシ類と異なり、雑草地や畦畔を経由せず飛来するため畦畔等の雑草管理の効果は期待できない。また、農地の集約化や多様な品種の導入による作期分散も成虫の寿命が長く移動性が高い本虫に好適であり、被害が拡大している。

一般社団法人奈良県植物防疫協会

〒633-0046 桜井市池之内130-1

奈良県農業研究開発センター内

TEL:0744(47) 4861

FAX:0744(47) 4862(専用)

HP: <http://www.narasyokubo29.sakura.ne.jp/>

目 次

◎日本植物防疫協会主催シンポジウム	1,2
◎令和7年度農薬安全使用研修会	3
◎登録失効になった農薬	
◎農薬の使用制限にかかる登録変更 (FAMIC HPより)	4

現在、研究中の事例として、水稲病害虫の発生予測アプリケーションや斑点米カメムシ類の発生予測・薬剤散布適期連絡システム、衛星画像等の ICT を活用したイネカメムシの総合防除技術の開発が挙げられた。

「水稲栽培技術(直播、高密度播種等)の現状と病害虫・雑草防除」

JA 全農 耕種資材部農薬課 下田周平氏
水稲栽培には移植と直播があり、移植は一般的であるが、省力化や低コスト化が求められている。また、大規模化が進む中、育苗時期の作業の集中が問題となっている。これらに対応するため、高密度播種が広がっている。高密度播種では移植に必要な苗箱数を減らし、省力化・低コスト化のメリットがある一方、箱剤の種籾当たりの施用量の減少による病害虫リスクが懸念されている。これに対応し、10a 当りの箱数に応じて使用量が 1 kg/10a となるように 50～100g/箱の範囲で調整可能な農薬登録が増えている。また、種子処理剤は種籾当たりの薬剤量の変

化が少なく防除効果が安定するため適している。雑草防除では除草剤の移植同時処理や省力製剤が利用されている。

直播栽培は、移植と比べ、雑草が発生しやすく、間断灌漑による残効切れが生じるため、体系処理で雑草防除を行う。また、出芽直後や根の位置が浅く、薬害が生じやすいので登録ラベルの遵守を徹底する。直播は病虫害防除では、種子処理剤や粒剤の土中施用が推奨されている。直播は移植とは異なる点が多いため、現場で参考となるモデル防除暦を作成している。

「北海道における水稻栽培と病虫害防除の現状と課題」

北海道立総合研究機構 中央農業試験場
野津あゆみ氏

北海道では経営規模が大きく、5ha 以上の経営体が 7 割であり、そのうち 30ha 以上が 8 割を占めている。北海道の気候に合わせ、耐冷性が極強で極早生品種の育成や成苗ポット様式の育苗方式等、独自の栽培技術が開発されている。病虫害防除は、温湯消毒等の種子消毒やヘリ散布が主体である。冷涼な地域だが、近年の高温により病虫害の発生が変化している。いもち病は健全種子や圃場周辺の菌密度が低いため少発生で推移し、抵抗性品種の増加やドローンの普及で適期防除が容易になっている。しかし、初発が早まっているため、注視する必要がある。疑似紋枯症（赤色菌核病）を含む紋枯病の発生は増加している。前年の成熟期に翌年の防除要否を判断し、赤色菌核病にも有効な箱施用剤または水面施

用剤、紋枯病に有効な茎葉散布等の対策を講じる。しかし、ヘリ散布の登録薬剤が限られる点や箱剤のコストが高い点等から、実際には防除が難しい。害虫も、様々な害虫が早発し、越冬も増え、増殖・加害が活発化している。斑点米カメムシの虫種にも変化が生じ、東北の主要な加害種であったアカスジカスミカメが道南でも構成種となっている。今後の発生拡大や新たな病虫害への警戒と対応が必要である。

「佐賀県における水稻栽培と病虫害防除の現状と課題」

佐賀県農業試験研究センター近藤知弥氏
佐賀県での防除体系は種子消毒＋育苗箱施用剤＋本田防除(8、9月)で、問題となる主な病虫害はウンカ類(主にトビイロウンカ)、コブノメイガ、スクミリンゴガイ、斑点米カメムシ、いもち病・紋枯病である。ウンカ類はトリフルメゾピリム剤に頼った体系であり、飛来源での抵抗性発達が懸念される。コブノメイガはもち品種で被害が多発している。クロラントラニリプロール剤が普及していたが、近年抵抗性発達により効果が低下し、防除体系の見直しに取り組んでいる。スクミリンゴガイは近年の温暖化で越冬量が増加しているため、越冬源の密度を減らし、田植え後の水管理の徹底が重要である。いもち病は近年感染時期の高温により、発生は抑制傾向であるが、紋枯病は発生リスクが高まっている。どちらも箱剤と本田防除で対応しているが、現状の 8 月防除はウンカ類に合わせた防除であり、防除適期とずれた病虫害に対する効果が疑問となる。

令和 7 年度農薬安全使用研修会「農薬は周りに配慮し正しく使用」

8 月 27 日に奈良県農業研究開発センター内交流・サロン棟にて標記研修会が開催され、約 50 名が参加した。また、今回から web 視聴が導入され、研修会当日に参加できない時も、職場や自宅から受講が可能となった。

(公社)緑の安全推進協会の川島和夫氏から、①農薬の適正使用について②無人航空機の安全な農薬散布の 2 部構成で講演があった。

農薬を使用する際、大多数の使用者が適正な使用や記録をしても、1 人の誤使用や不適切な記録により、収穫物の回収や損害賠償、再販の遅れやブランド力低下による収入減が発生する。1 番の問題は風評被害で、1 生産者の問題が都道府県レベルで拡大し、大きな影響を及ぼす。誤解や不注意による誤使用は完全に防ぐことは難しいかもしれないが、記録が適正であれば、早期解決が可能であり、早期の再出荷やブランド力の維持により被害を最小限にできるため、記帳は重要である。

農薬には①使用者②消費者(収穫物)③農作物④周辺住民や環境に対する 4 つの安全性が求められ、法令等の規則を遵守することにより、安全性を確保している。残留基準値の超過原因は使用基準違反 28%、器具洗浄不足 13%、飛散 13%となっている。ただ、43%は原因が特

定できず、これは適切な記帳ができていないからである。農耕地での農薬安全適正使用のポイントは、①ラベルの確認、②周辺との連携(連絡・周知)や飛散防止措置③器具洗浄の徹底④記帳である。

農薬による事故は毎年発生している。農薬使用後の作業管理不良が最も多く、次いで保管管理不良・誤飲誤食、保護具の装備不十分等となっている。土壌燻蒸剤等は被覆や期間を遵守すること、誤飲誤食につながるペットボトル等への小分けをしないこと、保護具の適切な着用が農薬事故を防ぐため重要である。

無人航空機による農薬散布に対する農薬登録の規制緩和が進み、稲や野菜類等で農薬登録数が増加したため、ドローンによる農薬散布が広がってきた。一方で事故も増加し、無人航空機事故の 8 割が農薬散布時に起きている。操縦者と補助者のコミュニケーション不足や散布区域内と周辺の障害物の事前確認不足が原因となっている。散布前に事前周知や危険個所の確認を行い、散布区域外へのドリフト防止策も講じる。散布中はヘルメットや農薬散布時の保護具を着用し、操縦者と補助者が常に連携を取りながら、風下から散布を開始する横風散布を基本として散布する。散布後のチェックも忘れずに行い、事故を防止していく。

登録農薬失効情報（2025.7.1～2025.9.30）農林水産消費安全技術センター（FAMIC）の登録農薬失効情報より抜粋

登録番号	農薬の種類	農薬の名称	申請者名 （略称）	失効日 月/日/年
殺虫剤				
7263	P A P 乳剤	日農エルサン乳剤	日本農薬	8/20/25
14840	P A P 粉剤	エルサン粉剤 3 D L	日産化学	9/25/25
15803	M E P ・ P A P 乳剤	ラビキラー乳剤	協友アグリ	9/18/25
16752	エトフェンプロックス水和剤	トレボン水和剤	三井化学加ワッ & ライフサイエンス	9/3/25
16767	エトフェンプロックス・チオスクラム粉剤	エビセクトトレボン粉剤 D L	和光	9/18/25
19641	ジアフェンチウロン水和剤	ガンバ水和剤	シン・エンタ	9/30/25
20388	デンブン液剤	粘着くん液剤	住友化学	7/14/25
22817	アクリナトリン・スピロメシフェン水和剤	クリアオール水和剤	バ・エル	9/30/25
23412	メタアルデヒド粒剤	メタレックス R G 粒剤	テ・サンゴス	8/25/25
殺菌剤				
17959	オキシリニック酸・有機銅水和剤	住化ナレート水和剤	住友化学	7/16/25
21643	メトミノストロピン粒剤	オリザトップバック	三井化学加ワッ & ライフサイエンス	9/11/25
除草剤				
17025	エスプロカルブ・ベンスルフロンメチル粒剤	日農フジグラス粒剤 1 7	日本農薬	8/20/25
17326	ベンタゾン・M C P A ナトリウム塩液剤	日産グラスジン M ナトリウム液剤	日産化学	9/18/25
17327	ベンタゾン・M C P A ナトリウム塩液剤	石原グラスジン M ナトリウム液剤	石原産業	9/26/25
19063	イソウロン・D C B N ・ D C M U 粒剤	ワイドウェイ粒剤	保土谷アグロテック	9/2/25
20150	イソウロン・テトラピオン粒剤	ロードキーパー粒剤	日産化学	9/12/25
21891	アシュラム・グルホシネート液剤	クサオール H 液剤	保土谷アグロテック	9/2/25
21893	アシュラム・グルホシネート液剤	クサオール液剤	保土谷アグロテック	9/2/25
23083	アシュラム・M D B A カリウム塩液剤	ユービーエルアシュラスター液剤	ユービーエル	9/30/25
23322	カルブチレート・プロマシル・M C P P 粒剤	ネコソギパワー	レインボー	9/30/25
23377	プロマシル・M C P P 粒剤	こっぱみじん W	レインボー	9/30/25
23541	フェノキササルホン・プロモブチド・ベンスルフロンメチル剤	アルファープロ H ジャンボ	三井化学加ワッ & ライフサイエンス	9/11/25
23545	フェノキササルホン・プロモブチド・ベンスルフロンメチル水和剤	アルファープロ H フロアブル	三井化学加ワッ & ライフサイエンス	9/11/25
23547	フェノキササルホン・プロモブチド・ベンスルフロンメチル水和剤	アルファープロ L フロアブル	三井化学加ワッ & ライフサイエンス	9/11/25
23980	イブフェンカルバゾン・イマゾスルフロン・ベンゾビシクロン水和剤	ツルギフロアブル	日本農薬	8/20/25
24116	プロマシル・D C M U ・ M C P P 粒剤	ネコソギトップ V 1 粒剤	レインボー	9/30/25
24159	フェノキササルホン・プロモブチド・ベンスルフロンメチル剤	アルファープロ H 豆つぶ 2 5 0	三井化学加ワッ & ライフサイエンス	9/11/25
24189	イブフェンカルバゾン・イマゾスルフロン・ベンゾビシクロン粒剤	ツルギジャンボ	日本農薬	8/20/25
24534	テトラピオン・プロマシル・M C P P 粒剤	ネコソギメガ粒剤 II	レインボー	9/25/25

農薬の使用制限にかかる登録変更（2025.4.1～9.30）農林水産消費安全技術センター（FAMIC）HPより抜粋

登録番号	農薬の種類（名称）	変更内容	申請者名 （略称）	登録日 月/日/年
19993	アセフェート粒剤（オルトラン粒剤）	ピーマンの削除	アリス ライフサイエンス	6/25/25
13177	アセフェート粒剤（ホクコーオルトラン粒剤）		北興化学工業	
21520	アセフェート粒剤（家庭園芸用オルトラン粒剤）	ピーマンの削除	アリス ライフサイエンス	
21789	アセフェート粒剤（家庭園芸用GFオルトラン粒剤）		住友化学園芸	
23038	D C M U 水和剤（M A I カーメックス D）	水稻（水田畦畔）の変更	アダマ・ジャパン	9/10/25
23781	D C M U 水和剤（丸和カーメックス D）		丸和バイオケミカル	
23433	D C M U 水和剤（カーメックス顆粒水和剤）	水稻（水田畦畔）の変更	アダマ・ジャパン	
23699	D C M U 水和剤（サンケイカーメックス顆粒水和剤）		琉球産経	
23700	D C M U 水和剤（一農カーメックス顆粒水和剤）		第一農薬	
23782	D C M U 水和剤（丸和カーメックス顆粒水和剤）		丸和バイオケミカル	